

急な激しい雨など、短時間に急速に発達する 現象について（速報）

—今夏の状況と気象庁の対応アプローチ—

JMA'S APPROACH TO IMPROVEMENT IN WEATHER INFORMATION FOR LOCALIZED AND SUDDENLY INTENSIFIED HEAVY RAIN

梶原靖司¹

Yasushi KAJIHARA

¹ 気象庁福岡管区气象台技術部予報課（〒810-0052 福岡市中央区大濠 1-2-36）

要旨

1. 局地的な短時間の非常に激しい雨が頻発

2008年7月末から9月初めにかけて、本州付近は上空の寒気や下層の湿った気流の影響で大気の状態が不安定となりやすく、各地で発達した積乱雲によって局地的に非常に激しい雨が降った。7月28日には金沢市を流れる浅野川がはん濫し、床上床下浸水等の被害が発生した。また、8月末には1時間雨量の記録を更新した地点が20箇所を超えるなど、東海、関東、中国および東北地方などで局地的な短時間の非常に激しい雨が降った。特に愛知県岡崎市では29日の1時間雨量が観測史上1位を更新する146.5ミリに達し、愛知県名古屋市や岡崎市を中心に広範囲で浸水害等が発生した。気象庁は、平成20年8月26日から31日に発生した豪雨について、「平成20年8月末豪雨」と命名した。

一方、7月28日の兵庫県神戸市都賀川での水難事故や、8月5日の東京都豊島区の下水道事故では、局地的な大雨による中小河川や排水施設での急な増水への対応が大きな社会問題となった。

2. 大気の流れの特徴

東アジアでは、上空の偏西風が蛇行しやすい状況が続いた。盛夏期においても、偏西風の蛇行に伴って朝

鮮半島付近で気圧の谷が深まり、本州の日本海沿岸を寒気が周期的に通過した。また8月上旬や下旬には、日本の南海上に偏西風の蛇行が強まって取り残された上空の寒気が停滞した。

一方、日本の南海上は上空の寒気に伴って低圧部となり、東海上の高気圧との間を吹く下層の暖湿流が本州付近に流れ込みやすく、日本付近は大気の状態が不安定となり積乱雲が発生発達しやすい場が続いた。

3. 局地的な大雨に対する気象庁の対処

今夏の状況に鑑み、雷注意報で突発的な雨の強まりへの注意を促すなどの緊急的対応を行うとともに、中長期的な取り組みとして、気象ドップラーレーダーの活用による雨雲の動向に関する監視精度の向上、現在より少しでも雨の降る地域を絞り込んで予想するための数値予報モデルの高度化など、様々な面での技術開発を進め、局地的な大雨に関する予測技術の高度化を図ることとしている。

(2008. 10. 16 受付)